

二つの保育



イギリスとフランスの保育

牛 島 義 友

一 イギリスの保育

ヨーロッパではどのような幼児教育がなされ、どのようにしてイギリス人やドイツ人やフランス人の個性的な性格が形づくられてくるかを知らうとするのが私たちの関心事であり、そのために昨年十一月から約三ヶ月間調査旅行をおこなった。努めて多くの幼稚園や保育所を見ようと努めたが、なおその数は限られており、これからイギリスの保育、フランスの保育と結論するのは正しくないかもしれない。それぞれの国にはさまざまな教育がなされてはいるが、なお共通に保育の特色とでもいうものがあるように感じられた。

教育原理や保育原理ではおそらくこの国でも同じようなもってもらいたいことが説かれてはいるが、現場の保育のやり方においてはかなり違ったものがみられた。

イギリスでは五才児の子どもはインファント・スクールに入れられ義務教育が始まる。ここでは午前は読み・書き・算数の三R Sが徹底的に教えられ、午後は比較的自由な自由活動として描画、工作、積木、水遊び、人形遊びなどがなされている。しかしそのやり方は多分に学校的であって、幼児保育の概念が当てはまらなかった。しかし四才以下の子どもを対象としたナーサリー・スクールになると完全な自由保育がなされていた。独立のナーサリー・スクールもそうだが、インファント・スクールに付属したナーサリー・スクールにおいても自由保育の姿がはつきり受け取られた。すなわちイギ

リスのインファント・スクールには、大概一クラスくらいナーサリー・スクールが設置されている。これは義務でないので働くお母さんの子どもが多いが、また幼児の教育のために入園させる者もいる。しかし概して言えば、ナーサリー・スクールはあまり振わず、親たちは家庭で教育した方がよいと思つてゐるものも少なくないようである。

働くお母さんの子どもたちが多いためにナーサリー・スクールでは給食や昼寝の設備も用意されている。年令も二、三才児も相当いたり、全体の空気も非常に和やかな子ども中心的な空気が感じられる。インファント・スクール付属のものは三〇人ぐらいで、主任と補助者の二人ぐらいで保育されているものが多く、独立のナーサリー・スクールでは十人ぐらいの幼児に保母一人ぐらいの割合になつてゐる。保母たちのする主な仕事はミルクを飲ましたり、排泄の世話をしたり、昼食の準備、食事の世話、それに引き続いてベッドをしつらえ、寝かしつけるといったような仕事が割に多いために、いわゆる改つて保育をするといったような態度が少なかつた。もっとも子どもは自由に遊びたがるわけであるから、保母さんたちはそれを追っかけて、その活動をできるだけ豊富にしてやるように努力はしている。一せいに子どもたちを集めるというようなことは歌とお話の場合くらいで、先生がピアノ

をひきはじめると子どもたちが集つてきて歌つたりお遊戯をしてゐる。もっとも中には知らん顔をして今までの砂遊びを続けているものもある。またお話の時間になると先生は子どもたちを自分の近くに集めてお話をする。しかしそれ以外の時間は好きな遊びを勝手にやらすという傾向が強かつた。また保育者に尋ねてみても食事や午睡以外は保育に時間割をおいてゐるわけではないし、また一年間のカリキュラムを考へるというようなこともあまりないようであつた。子どもたちが自由に伸び伸びと遊べばそれが一番よい保育であると考えてゐる如くで、その遊びの遊具には心を配つてゐた。大概の遊戯室には水遊び、砂遊び、粘土遊びの台が設けられてゐるし、ドルハウスが必ず設けられてゐた。子どもに対して集団的な指導がほとんどなくて、個別的指導が主になつてゐるし、叱つたりしつけようとする態度も少なかつた。食事の場合を見ると先生が皿に料理を盛つて子どもに渡すと、子どもはさつさと食べ始める。食前の感謝をしてゐたのは宗教教育に特別の興味をもつてゐる一つのナーサリー・スクールだけであつた。また皆がそろうまで待つというわけでもないし勝手に手に食べ始めてゐる。すんだお皿を一ヶ所に持つていくくらいのこととはさせてゐるが、食事に長くかかる子どもがあつても別に何とも言わないで自由に食べさせてゐた。すなわちこ

ここでは子どもに対する抑圧を最少限にしていた。唯一の禁止、抑圧といえ、子どもが大きな声を出したりさわぐ場合である。イギリスでは大きな声を出したり騒音をたてることを極端に嫌い、おとなたちはひそひそと話をしているし、教師は小声で講義をし、また少年たちがわれわれに話しかけるときにも実に物静かなおだやかな声で話しかける。このしつけはすでに幼児から始められる。

二 フランスの保育

これに対してフランスの幼児保育は対照的であるといつてよいかもしれない。フランスでは五才以下の子どもはエコール・マテルネに入学する。なお幼稚園もあるが、公立の施設としてはエコール・マテルネの方が発達している。これは義務教育ではなく、働くお母さんを対象とした保育所的な性格も含んでいるが、文部省系統に属している。その設備は非常に立派でヨーロッパにおけるどの幼児教育機関よりも優れている。義務教育でもないものにこれほど立派な公立の施設を作っているのはフランスの教育に対する熱意の現われといつてもよからう。

このエコール・マテルネには食堂や寝室の付属したものもあるが、食堂は少数の子どもだけが利用する。向うでは昼食

は一家そろって自宅で食べる習慣であり、大概の親たちは家に帰るので子どもも自然、家に帰って食事をする。したがって保育の内容にはこのような生活指導的要素は少なくてもっぱら教育的な面が強く出されている。

五才児の保育をみるとすっかり学校と同じで、文字も教えるし、数の計算などもどンドン教えている。それで私は五才児のクラスには興味がわかず、幼児保育らしい姿を見ようと思つて四才児のクラスを特に観察した。しかしここでも自由保育とはおよそ正反対の学習や計画的保育がなされているのに驚いた。一例を挙げてみると、まず子どもに二本の小さい棒を与えてどちらが長いか、短いかを尋ねている。この程度のことなら驚きはしないが、この棒切れを五本にふやしてそれを数えさし、次にはこの細い棒切れを使つて5という数字を作らせていた。すなわち四才児ですでに5という数字を知つていなければならないし、棒切れで5の形を上手に作らねばならない。形のよい字のできた子どもには先生は褒美のカードを与えたりする。電車キップのちょっと大きいくらいの紙で、中に *bon point* と書いてある。よくできる子どもは二枚も三枚も貰っているし、できない子どもは一枚も貰えない。次に子どもたちに小さな粘土の塊りが配られた。どんな製作が始まるのかと見ていると、子どもたちはそれで細い線

を作り、それでまた5という数字をこしらえていた。すなわちこの約四〇分くらいの保育は完全に5を中心とした保育の展開であった。あらゆる物を使って徹底的に数を教えこもうとしている。

またここでは大小の区別とか、形の弁別、音の区別、リズムの区別といったような感覚訓練のことをいろいろとやらせていた。すなわちフランスの保育の基礎に流れているものはモンテッソリー法である。ここでは知的活動の基礎になる知覚弁別の訓練に重点がおかれている。元来フランスの教育は主知主義的な傾向が強い。小・中学校では知育偏重の教育をやっているが、エコール・マテルネにおいてもすでにこの主知主義が根底に流れている。フランス人たちは教育する場合にはすぐそれが何に役立つということがはっきりしたものしかとらないようである。自由遊びなどは果してどの機能を発達させ、何の役にたつかということがはっきりしていないのでフランス人には歓迎されない。フランスでは仕事と仕事の間の遊び時間があるが自由遊びの時間はないし、広々とした庭園は作っても遊具は全然設けていないものもあつた。彼らはこのような保育を心理学的な基礎にたつたものだと主張している。しかしその心理学は実験心理学には違いないが、近代のパーソナリテイの発達などを考慮してはいない心理学で

ある。社会性を養うなどということはあまり考えていないし、さきほどのカードなどはむしろ競争心をあおり劣等感を植えつけている。すなわちフランスの保育はイギリスのナトサリー・スクールのそれと正反対のゆき方をとっている。

たしかに、自由保育はなにか頼りない感じを与える。といつてフランスのように徹底的な教育ではまた子どもの興味、幸福などは無視されてしまう。子どもには生き生きとした自発的な姿というものがあまりみられない。この二つの保育は幼児教育における大切な二つの契機ではあるが、それを極端に一つだけをとつた場合にはやはり不完全な保育となるのではなからうか。ヨーロッパの保育者たちはあまり保育に苦勞をしていないようである。イギリスのナトサリー・スクールで働く保母たちは子どもに楽しい充実した遊びを与えればよいと考えているので気楽な気持ちで遊ばしている。フランスの保母たちはどうしたら早く文字を教え、計算ができるようになるかということだけを考えていればよい保育になると思つているようである。この二つを調和させるところに本当の保育があるし、いかに調和させようかと日夜心を砕いている者が本当の保育者であるといふべきではなからうか。